

これ くに ひろ あき  
**是國 裕光さん** (平成13年度入学生)



— 現在のお仕事

経済学部の学生支援を担当しています。授業の時間割を組んだり、学生さんの成績を数えたり、入試や卒業式などの準備をしたりと、一言では言い表せないくらい、仕事の内容は多岐に渡ります。学生さんや先生が授業に集中できる環境を作るのが仕事です。

— この仕事を選んだ理由

進路を考えたときに、民間に就職するのか、公務員になるのか、大学院に進学するのか、なかなか決められなくて迷っていたのですが、三年生の二月になると、

もうこれ以上決断を先送りできなくなると、民間企業に就職しようと考えました。でも、多くの学生さんが考えるような、東京や大阪の人気業種の大企業で働いている自分の姿が想像できなかつたんです。その原因はやっぱり、自分のやりたいことをきちんと決めていなかっただからだと思います。そこで、もつと自分に身近で、自分が本当に好きなものって何だろうって考えました。すると、自分が通っている広島大学が一番好きだと思えてきて、もつと広大で過ごしたいと思うようになり、だったら大学職員になって、広島大学や総合科学部に恩返しができるたらと思いい、この仕事を選びました。

— 総合科学部の魅力

総科は、いろいろな人がいて楽しい学部だと思います。それぞれ違う分野の勉強をしている人たちと友だちになれるから、話を聞くと面白いですよ。全国で

総合科学部の名前を持つ学部は三つしかなくて、そのユニークさは総合科学部として誇るべきだし、現に卒業した今も、総合科学部出身であるということに誇りを持っていきます。後は、先生が多いことも魅力です。

— 総科に入学しようと思った理由

高校生の時、環境問題に興味があつて、環境共生科学プログラム（現：自然環境科学プログラム）に行きたいと思つて受験したのですが、そのときは合格できませんでした。予備校時代に、予備校の近くでJリーグの試合をやつていて、スポーツはなぜ人を引き付けるのかということに興味が出てきて、今度は人間科学プログラム（現：スポーツ科学プログラム）に進もうとも考えました。いろいろなことに興味があつても、総科だったら幅広く学べると思つていたので、志望学部は変わることなくずっと総科でした。一年生末のプログラム選択はかなり迷つ

— 学生時代

入学当初はなかなか溶け込めなくて、半年間くらいは大学があまり楽しくなかつたんです。でも、浴衣祭りや大学祭などのイベントを経てみんなと仲良くなることができて、二年生になつたらオリキャンのスタツプにも加わつて、大学生活がどんどん楽しくなつていきました。大学生活一番の思い出はやっぱりオリキャンです。オリキャンがなかつたら楽しい大学生活もなかつたと思います。総科のオリキャンは学生主体で作りに出していくから、楽しいだけじゃなくて、達成感も得られました。

三、四年生のときには、ボランティア活動にも参加しました。山の間伐や草刈り等、農林業のお手伝いや、地域を活性化させるといふ森林ボランティアに参加しました。その中で一年間、企画・立案等の仕事をやら

## OB紹介

せてもらいました。四年生だったので、ボランティアの仕事と大学職員の採用試験の準備で結構大変でしたが、ボランティア活動から学んだことを今の自分の仕事に活かせているので、勉強以外の課外活動も大切だなと思っています。

ボランティア以外にも、サークル活動をしたり、アルバイトしたり、いろいろなフィールドで活動することは、将来きつと役に立つと思います。活躍する分野は何だっていいんです。西条はまだまだ田舎で、受身の学生生活だと何もやってこないですから、自分で積極的に行動することが大切です。

―仕事をしているの苦労  
一番悩むのは、学生さんどどのように接すればよいかということ。たとえば、提出物の期限を守らないなど、注意しなければならぬ場面であいまいな対応をすると、学生さんはラッキーって思うかもしれ

ないけれど、社会人になって同じことを繰り返すと大変なことになり、長い目でみると、本人のためにはならない。学生さんを注意したり怒ったりすることは勇気がいるんです。結局、仕事の苦労や悩みというよりも、甘いんです、自分自身に。大学職員としてはまだまだです。

―今後の目標

大学職員にはどういう能力が必要とされるのか、正直なところ、まだ自分ではよく分かっていません。今後、どのような能力が必要なのかということ調べて、そして考えて、身に付けていきたいです。また、これは働き始めたころからずっと考えていることなのですが、いつか自分の出身学部である総合科学部で働きたいです。本当にお世話になって、楽しい四年間を過ごさせていただいて、高校を卒業したばかりのところとは見違えるくらいに成長させていただいて、この学

部にその恩返しをしたいと考えています。

―学生へメッセージ

高校生のときは、大学に合格することがゴールだと思っていたら、いざ入学してみると、そこから新たなスタートなのだ感じた人は多いのではないだろうか。ゴールしただけではもう一度スタートを切らないと、大学四年間ってあつという間に過ぎていつてしまう。というのは誰もが感じるのだと思います。今度は就職することがゴールって思う人もいるかもしれないけれど、決してそれはゴールではないし、どんな仕事に就いても、勉強は終わらないどころか、もっと勉強することになります。ゴールは存在しないし、ある時点をゴールだと思ってしまうと自分が成長しなくなってしまう。僕もそうだったけれど、将来働くっていいことは、イメージしにくいと思うし、

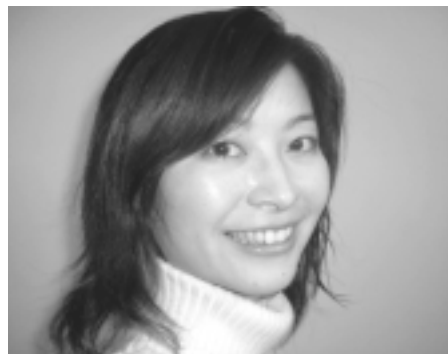
実際に働いてみないと分からないですよ。でも、そのことを懼れたり不安になつたりする必要はないと思います。働くことは本当に楽しいし、達成感のあることだし、時には怒られたり落ち込んだりこともあるけれど、やっぱり毎日がすごく楽しくて、働いていてよかったと思えるから、不安に思わずに、自分の気持ちに正直に、自分が何をやりたいのかをしっかりと考えてほしいと思います。

あと、これは宣伝になつてしましますが、僕がここで職員をしているのは、広島大学が、総合科学部が大好きだということに尽きると思います。広大が好きな人、総科が好きな人は、是非一緒に働きませんか。もっともっと愛される総科にしましょう(笑)。

(担当 17生 宮下 綾奈)

すえ なが ゆ き  
末永 由希さん

(平成5年度入学生)



今回のOG紹介は中国国際放送局で働く、末永 由希さんです。

— 現在のお仕事

現職の肩書きは「専門家」なんです。実はコレ、中国独特の仕事かもしれません。中国では、国家がいろいろな国から「専門家」を招聘して、外国語が必要な分野（大学の講師や国際放送局や雑誌など）に派遣しているんです。タテマエはラジオのDJですが、どちらかというと言語面のお手伝いで来ている感じですよ。

ね。仕事の大半は、中国人スタッフが書いた日本語原稿の修正や日本語アナウンスのアドバイス、翻訳などです。

— 中国国際放送局について  
国際放送のスタンスというのは、基本的にどこの国も一緒だと思えます。（国際放送とは）自国の情勢・考え方を、海外に向けて広く知ってもらうために行っている放送です。いろんな国が国際放送をやっています。日本でも、NHKが各言語で海外向けの放送を行っていますよ。

今、勤めている中国国際放送局は、今から六十五年前、一九四一年に開局しました。世界各国に向けて、三十八言語・四つの中国語方言で放送しています。中国の最新情報を楽しめるのはもちろんですが、たとえば、同じニュースでも、日本のメディアによる報道のされ方と、中国のメディアによる報道のされ方は

違うことがあります。「日本ではこのように伝えられているけれど、中国ではあんなふうには伝えられているんだなあ……」と多角的に物事を分析したい方にとっては、国際放送はおすすりめです。

— 仕事の環境  
中国と日本の差

子どものころから、漠然とですが「海外で働いてみたい。海外関係の仕事をしたい。」という思いがありました。ただ、実際やってみると、これがなかなか大変です。今でこそ、中国と日本の距離はかなり近づいていますが、中国と日本の社会は基本的に違います。資本主義・社会主義の違いだけでなく、価値観や観念がことごとく違うなあ……と。日本では許されることが中国では許されなかったり、その逆も多いです。

例えば、日本だと、プライベートよりも仕事を優先させ

る人が多い。これは決して良いことだとは思いませんが、仕事は完璧にやらなければ、という日本人気質がある。ところが、中国は、家庭を犠牲にしてまで働かない人が多いです。こちらで働き始めた当初は、それがカルチャーショックで、「どうして中国の人は、こんなに働かないんだろう??」と思うていました。でも、よく考えたら、プライベートを大切にすることというのは非常に重要なことですし、「日本人が少し異常なのかな??」と我が身を振り返るようになりました。

中国のいいところは、男女平等社会だということ。いや、むしろ女性が強いんです。うちの部長も女性です。男性が尻に敷かれている。日本で働いた経験もありますが、女性に求められる役割というものがたまたま腑に落ちないものを感じていました。かなり男女機会均等が進んだとはいえ、

# OG紹介

「女性なんだから、こうするべき」、「女性だから、このポジションを担当してほしい」みたいな暗黙のルールがあります。もちろん、「女性らしさ」は大切にしたいですけど、女性であることで、息苦しさを感じることも日本では多かったです。それが中国では、男女関係なく、仕事仲間としてお互い見てくれるので、すごく楽な気持ちで働かせてもらっています。そのかわり、「女だからできない」という甘えは許されません。でも、私はそういうほうが肌に合っています。

—中国で働くこと

よく、「中国で働こうと思うなんて、中国が本当にお好きなんですわね。」と言われますが、「好き」というより「おもしろい」と思うから、ここにいるんだと思います。こんなこと言うと、中国の方に誤解されてしまうかもしれません

が、ただ「好き」なだけじゃなくて、「嫌い」な部分もあるし、日本人としてどうしても理解できない部分もある。国が違えば、文化・風習が違って当然です。その違いを不快に感じて拒否する人もいるかもしれませんが、私は、「その違いはどこから来るのだろう？おもしろいなあ」と、違いを認められる人間でありたいと思っています。そうした違いも含めて、中国のことをよりよく知るために、北京へ来たのだと思います。

## 経歴

1993年 入学&総合科学部外国語コース中国語専攻  
 1997年 卒業&JTBに就職  
 2001年 JTB退社&北京電影学院（映画学校）に留学  
 2002年 帰国&NHK広島放送局入局（キャスター・リポーター・DJなど担当）  
 2005年 NHK広島放送局契約終了&中国国営ラジオ局「中国国際広播電台（中国国際放送局）」で働く。

—現在に至る経緯

大学で語学を専攻してしましたので、やはり語学を使える仕事に憧れていました。そこで、ゆくゆくはガイドの仕事などができればいいなと漠然と考え、旅行会社を志望しました。

そのなかで、内定したのがJTBでした。JTBでの四年間は、さまざまな仕事をさせていただきました。カウンタ―業務全般、企業営業、海外ブライダルセールス、格安航空券販売・・・ただ、いつ

かは中国語を使って仕事をしてみたいな～と思っていたのですが、なかなかチャンスに恵まれませんでした。特に、不景気な時期でしたので、営業に力を入れなければならず、正社員である私は、販売促進・売り上げ達成のためにどうしたらいいかと頭を悩ませ、外回り営業を続けた四年間でした。

もちろんそれは非常に大切なことですし、勉強になることが多かったのですが、中国語とはまったく縁のない毎日な・・・と、悶々としていた部分もありました。中国との縁を切りたくなくて、中国に関する本を読んだり、中国映画を見たりするうちに、

中国への思いがどんどん強くなってきて、「あー！中国に行きたい！」と。

—日本から中国へ  
 そんなふうと考えていた矢先、少し体調を崩してしまい、仕事をやめて一年ほど充電期間を置くことになりました。何もせずに、習い事でもしながらからからしてもよかったです。ですが、せっかくなら好きなことをしようと思ひ、中国留学を考えました。中国語のレベルを取り戻したかったことはもちろんですが、かねてから好きだった中国映画の勉強をしたかったので、北京の名

すえ なが ゆ き  
末永 由希さん

(平成5年度入学生)

門映画学校「北京電影学院」の普通進修生(聴講生みたいな)として、一年間留学しました。

私は学生時代、芝居をやっていたのですが、映画に関しては「見るのが好き」という程度の素人です。それでも、主映画の撮影に参加させてもらったり、自分でも脚本を書いてみたり、久しぶりにもものづくりの喜びを味わいました。電影学院で、いろいろな人に触発されて、学生時代、芝居をやっていたころのように何かものづくりを通して、毎日ワクワクしながら過ごしたい!と考えるようになりました。

―番組制作というものづくり  
留学期間も終わりに近づいたころ、地元・広島のNHKが、スタッフ募集をしていることを知りました。北京に残って働くことも考えていましたが、急がば回れ。日本に

戻って、イチから番組制作の基礎を学びたいと履歴書を送付。その後、面接で合格、二〇〇二年三月から、NHK広島局でリポーターやラジオDJなどの仕事を中心に三年間やらせていただきました。時には自分でビデオカメラをまわしたりしながら、がむしゃらに仕事に打ち込んだ三年間でした。

やりがいを感じる毎日でしたが、留学から帰ってきて、また中国と縁のない日々が続いていましたので、「やっぱり、中国関係の仕事をするのは無理なのかなあ……」とあきらめがちにもなっていました。方向転換を考えるようになったのは、入局三年目の二〇〇四年から二〇〇五年にかけてのことです。

―再び、中国へ  
西安の大学で行われたステージで、日本人留学生が行った出し物に対し、西安で

猛烈なデモ抗議運動が発生しました。また、中国で行われたサッカーアジアカップでは、日本チームに対する激しいブーイング。さらに、全国各地でデモが発生、北京の日本大使館に投石されるなど、日中関係は荒れに荒れました。私は連日、日本メディアの報道をテレビで見っていました。「中国の人たちは、日本に対して激しい憎しみを持っている」という印象を受けました。悲しく、不快な気持ちになりました。

しかし一方で、夏休みを利用して北京に行き、いろんな人の話を聞いてみると、あの日本での報道は一体本当なのか?と疑いたくなるような平和ムード。また、同じ時期、中国からの友好交流団体を取材させていただく機会があったのですが、そこでは温かい交流は変わらず続いているのです。

反日デモが起こったのは事



日本語を学ぶ学生達と一緒に (左端 末永さん)

実。でも、それだけじゃない。中国と日本は、仲がいいのだろうか?それとも、憎しみあっているのだろうか?中国の人たちは、日本のことを、本音でどう思っているのだろうか?どっちが本当なのか……私の心は揺さぶられました。そんなとき、以前見学させていただいたことのある北京のラジオ局「中国国際放送局」から連絡をいただきました。この機会を逃すと、一生中国で働くこともないかもし

## OG紹介

れない。中国のことを本当の意味で理解することはできないかもしれない。とにかく行ってみたいと何も始まらないと思つて、NHKの契約満了を機に、二〇〇五年六月、北京へとやってきました。

— 学生にアドバイス

最近、ある大学生に話を聞いたら、レポートを書くときなど、調べ物はインターネットを使うことが多いんだそうですね。でも、インターネットなど便利なツールがあると「自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分なりの考えを出す」ってことが、疎かになる危険もあると思うんです。

中国の話になって恐縮ですが、今、日本では「日中関係は最悪だ」「中国では反日感情が強い」というイメージばかりが、伝わっているような気がします。でも、本当にそうなんですか？ 私も北京で働く前、「中国に行っても大丈

夫なのかな……」と正直不安でした。

でも、北京で暮らしていると、みなさん、日本人の私を、ひとりの市民として受け入れてくれています。「日本に興味があるので、日本人と交流したい。」と積極的に活動している方もいます。また、日本人と中国人で共同起業して頑張っている方々も多く、草の根の部分では、前向きな関係が生まれつつあるのを感じます。もちろん衝突も多いし、両国の間には問題も山積みです。でも、ニュースを見て、本を読んで、ネットで調べてみるだけでは、中国人の方々の本音は分からないんだなあ……とつくづく思います。

実際にその場に行ってみなければ分からないこともあります。どうか、みなさんも、自分の好奇心のおもむくままにいるんな人に会って、いろんな場所に行つて、いろんな経験をしてください。「世界を

見たい」という人は、アルバイトを頑張つて旅行や留学に出るもよし。早くビジネスについて学びたいという人は、インターンシップにチャレンジするもよし。社会に出ると、お金がもらえる代わりに、時間が制約されます。それは学生時代には気づかないんですけど、社会人になったときに、きつと痛感するはずですよ。

私も、あともう少し北京で過ごすことになりそうです。が、日本と中国の間にある誤解や偏見を少しでも解いていけるよう、もつともつと、やらなければいけないことがある気がしています。またいつか、大きな自分になって広島に帰りたいと思っています。みなさんの夢がかなうよう応援しつつ、私もみなさんに負けないよう、努力していきたいと思つています。

### 参考

興味をもたれた方は見てみてください。

中国国際放送局

<http://japanese.cri.cn/>

AM放送しています。

AM1044 (短波放送・インターネットラジオもあり)



古い町並みが保存されている地区で

(担当 18生 荒川 洸一)